

特集

協同労働の協同組合で働くこと

相良 孝雄

(協同総合研究所事務局長/労協連・労協センター事業団人材戦略部主任)

「地域活性化に貢献する協同労働」。『クローズアップ現代～働くみんなが経営者、雇用難の社会を変えられるか。～』(2013年2月7日にNHK総合で放映)での1場面である。この番組では、低成長時代の日本社会の中で、格差・貧困が広がり、仕事があっても不安定でやりがいを感じなかったり、働きたいのに働けない人々にフォーカスを当て、「協同労働」が社会的矛盾を解決することを捉えた番組となっている。富沢賢治氏(協同総研副理事長)が出演者として、協同労働の協同組合で働くことはディーセント・ワーク(人間らしい労働)であると解説している。

もう一つ紹介したい。2013年2月2日に封切られた映画「ワーカーズ」。自主上映会を全国各地で開催する中で、この一年間で約100ヵ所、上映回数360回、2万人が観覧している。感想文として

- ・「お互い出資して働くという働き方に驚きました。だからお互い意見をいうことができる。ワーカーズの職員だけでは地域は活性化できず、住民の助けがいることを再認識しました。利益追求ではなく、本当に社会を良くしていく気概が伝わってきました。」(30代無職)
- ・「様々な地域の知恵を集める地域懇談会、とても良い仕組みだと思います。また、1人ひとりが出資して仕事をつくる仕組みは退職者の新たな活動の場となると思いました。この映画は全国の民生委員の研修会でぜひ、上映していただきたいと考えています。(60代 民生委員)
- ・「働く人、まちの人、それぞれの思いが伝わる映画でした。協同労働はインクルージョン(包摂的)な働き方だとよくわかりました。(20代 生協組合員)」

「協同労働」の働き方が、注目を集めている。その中で「協同労働の協同組合」に対する評価や課題が、研究者の間でも活発に議論がされ始めている。その中で、今回の特集は、協同労働の協同組合で働く仲間、つまり当事者である私たち自身が、どのような思いで働いているのかという「協同労働の協同組合の労働観」を紹介し、さらに協同労働の協同組合で働くことの意味や価値を深める中で、「働くことの意味」を社会に問う意味で特集を組んだ。

その中で、労働者協同組合(ワーカーズコープ)は、協同労働(働くものが出資し、経営し、労働をする。)の働き方をしている。つまり労働者が組合員となっている。この協同労働の働き方は、労

働者を主体者にするという意味で、労働者協同組合の大きな組織的特徴がある。この「協同労働」の働き方は、今後、労働者協同組合の「専売特許」ではなく、社会のあちこちで「協同労働」で地域づくりや仕事おこし、社会づくりを担う団体が近い将来、生まれてくると感じている。

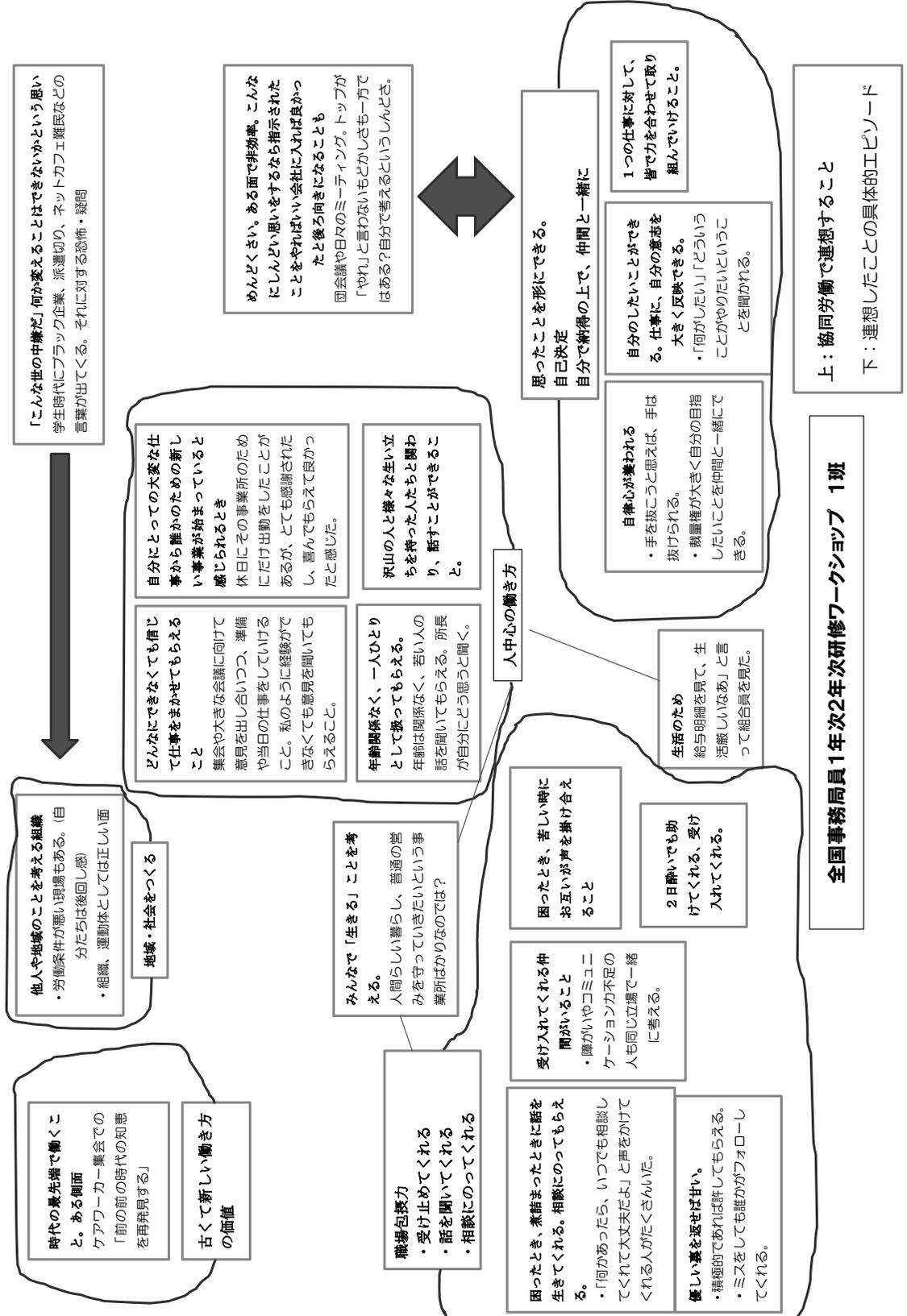
今回の特集では、多くの立場から「協同組合・協同労働で働くこと」にフォーカスを当てている。全国に事業を展開する労協センター事業団には、全国異動がある事務局員という制度がある。入団して1年、2

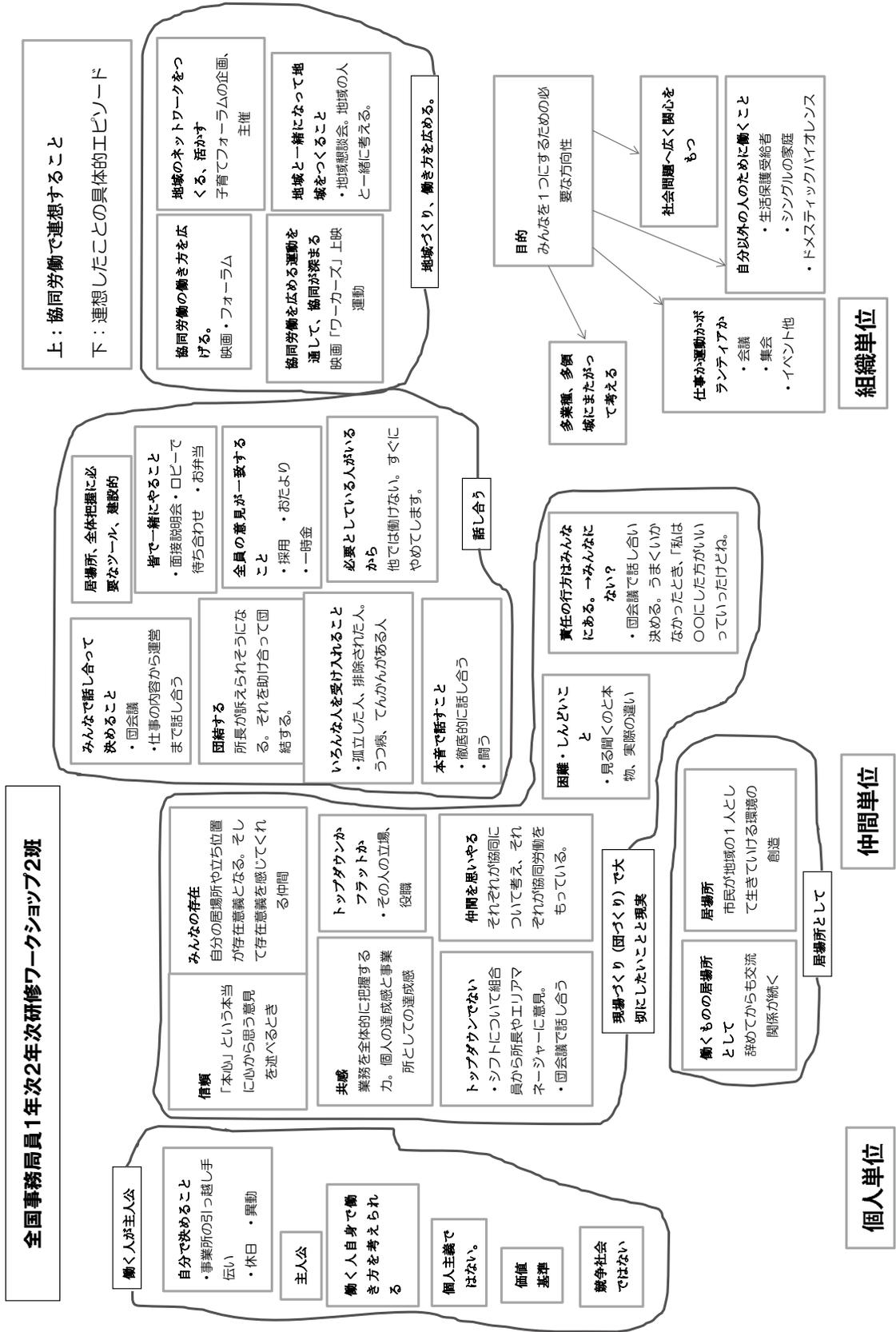


ワークショップの様子

年目の事務局員候補や、「よい仕事」を葛藤しながらも職場づくり(団づくり)をしている事業所の所長、各地域労協・高齢者協同組合で活躍するリーダー、労協センター事業団の事業本部(地域本部)の役員、最後に人材育成が急務の課題の中で、ワーカーズコープの学校づくりの計画の必要性を労協センター事業団の藤田理事長に寄稿していただいた。

私自身も人材戦略部として関わる中で、労協センター事業団全国事務局員1,2年次研修の内容を紹介したい。それは入団してから定期的に全国本部の主催の研修を行う中で、全国事務局員の学びの変化を系統的に知ることができるからである。次ページにあるのは、「協同労働とはなにか」というワークショップを行ったときに出たものをデータ化したものである。3班に分けて行ったが、紙面上の関係で、2班分のワークショップの結果を紹介する。





ワークショップではKJ法を用いて、分類分けをした。

1班では、協同労働で連想することとして、「職場包摂力(受け止めてくれる)(話を聞いてくれる)(相談にのってくれる)」「人中心の働き方」「思ったことを形にできる。自己決定とともに自分で納得の上で仲間と一緒に」「古くて新しい働き方」「地域社会をつくる」などが大項目として出ている。そして、どの項目でも、連想したことのエピソードが描かれており、連想したことを実感していると思う。

2班では、「働く人が主人公」「現場づくり(団づくり)で大切にしたいことと現実」「居場所として」「話し合う」「地域づくり、働き方を広める」「目的」が大項目に挙げて、それを下に書かれているように、「個人単位」「仲間単位」「組織単位」でまとめている。

この2つのワークショップの結果を見て、共通するところは、2つある。1つは「働く仲間の人間関係」にフォーカスを当てていることが多いことである。入団して、1年目では、事業所やエリアに配属される中で自分の役割をどのように見出すのかというところに焦点がいき、2年目は事業所での自分の役割は明確になりながら、現場づくりで葛藤や挑戦をする時期と重なるために、働く仲間の人間関係に焦点があたると考えられる。2つ目は「協同労働」での「仕事おこし」という視点あまり出てこなかったことである。私感ではあるが、同じワークショップを事業本部の所長メンバーと行ったときには、「仕事おこし」というフレーズが多く出たこともあり、その落差を感じた。

労働者協同組合「新原則」の定義には
「協同労働の協同組合とは、働く人びと・市民が、みんなで出資し、民主的に経営し、責任を分かち合って、人と地域に役立つ仕事をおこす協同組合です。協同労働とは、働く人どうしが協同し、利用する人と協同し、地域に協同を広げる労働です」

とあるが、現在の1, 2年次全国事務局員候補の焦点として、人と協同することの実感や体験をしている時期にあたる。それを基礎として「人と地域に役立つ仕事をおこす」という視点に立った実感や体験が今後の課題となる。

若い協同労働の協同組合のリーダーが成長するために、自分の協同体験を話し、仕事おこしの経験なども出し合うような、学習・研修の場を今後もつくっていきたい。